

吃音者を巡る差別語の問題について

もう1年も前の話になりますが、『吃音とコミュニケーション』紙上で伊藤さんが「どもりはどもり」という巻頭言を書いています。「事務所問題」で自重していた巻頭言の執筆を復活させたということで、問題になった文ですが、私としては、むしろその内容のひどさに、批判しておきたいという気持ちがありました。しかし、その時は全言連を巡るやりとりの中で、控えていました。そういう中で、全言連の池田現会長が伊藤さんの文を引用して、どもりという言葉に関してのコメントを『全言連ニュース』に掲載するに及んで、ちゃんと批判しておきたいと筆をとりました。

そもそも差別語の問題はどういうところで問題になっていたのでしょうか？確かに、マスコミの自主規制の多くは、差別を無くそうというところで、差別語を問題にしているのではなく、差別が現実にあるということを隠蔽し、差別を内化させる意味が大きく、寝た子を起こすなという、むしろ差別的な対応になっている現実があります。しかし、そもそも自主規制が起きたのは、差別に対する被差別者の糾弾を通し、起きて来たマスコミなりの差別へのとらえ返しから起きたことです。そのことが制度化一般において多々起きるように、空洞化したところで、単に言葉の表面的なとらえ返しや、言い換えになっているのですが、差別語のマニュアルを作る行為の中では、それなりに差別のとらえ返しがあったはずですが、どもりという言葉に関しても、現実にはその言葉に差別的な意味が懐胎しているというとらえ返しがあったと思います。それは多くの障害者に対する差別語と同じように、障害と障害者を同時に指す言葉が、はっきりした負価値性を示す差別的な意味をもっていることから類比しえます。

さて、当の伊藤氏の文は何を言いたいのでしょうか？伊藤氏の文は分かりやすいということですが、理論—論理を問題にする者からとらえると極めて難解な文になっています。何を言いたいのか意味不明です。差別語を巡る色々な論争がありますが、その論争をきちっと踏まえているとはとても思えません。これまでの障害者運動、そして他の被差別者の反差別の運動の中で語られて、蓄積されて来た地平と無縁な議論としか思えません。

差別語の問題に関しては、反差別という中であくまで問題にされることです。差別語を問題にするのは、差別語や差別的な文章が被差別者を傷つけるというところで問題にしているのです。確かに、言葉だけを問題にしても、その言葉が出てくる関係性そのものをも問題にしなければ、単に差別を内化させるだけです。しかし、その関係性そのものをも問題にしたところで、言葉も問題にしていかなければ、現実にはその言葉に傷つくことを解決していくことができません。

差別語の問題に関しては、表現の自由との関係で衝突が起きています。そこで言う自由とはなんのでしょうか？それは差別する自由ということではありません。作家の筒井さんの断筆宣言を巡る問題で、作家の曾野綾子さんは、「いいえ、言葉というものは、それがあふ限り使います。そういう言葉を使う人間の品性を判断なさるのは読者の自由でせす。しかし、言葉はある限り使えねばなりません」と居直っているのですが、これは「私は差別

（的な関係）がある限り私は好きな時に好きなように差別するのだ、好きな時に私は人を傷つけるのだ」という居直りにすぎません。これが差別語を巡る表現の自由の中身です。伊藤さんの文と、この曾野綾子さんの文はどこが違うのでしょうか？確かに、伊藤さんの文には、マスコミの形骸化した差別語への対応に対する批判が孕まれています。被差別者の差別語に対する基本的姿勢が欠落しているのです。差別語が実際に、被差別者を傷つけているという問題にどういように対応しようとしているのでしょうか？伊藤さんの中には、差別に対する怒りを感じることはあるのですが、彼は運動として私が知る限り言友会として反差別ということを一度も展開したことがありません。反差別ということがないところで、差別語の問題を問題にしたらどうなるのか、という端的な例が、この文なのです。その文は結果として、差別者の論理に迎合しているのです。

障害者とその関係者の活動は、「愛される障害者になろう」という差別に屈服・迎合したところからしか始まりませんでした。そのことに対決して、反差別の地平を確立していきました。吃音者宣言の中にも、そのような衝動がありました。しかし、そのような地平を確立するのに失敗した言友会の運動は、結局「愛される障害者になろう」という活動の変形である「気持ちの持ち方を変えよう」というところに収まってしまっています。

そのような中でののかの文です。そこには、反差別という地平での確立がないのです。差別語の問題はあくまで、反差別というところで問題になるのです。そこに、中間的立場などありようがありません。伊藤さんの文の悲惨さ—非論理性はそのような反差別という立場の確立の失敗から起きた、悲喜劇としか言いようがありません。

池田さんの文も同様です。どもりという言葉の歴史性を無視して、自分たちはどもりという言葉を食べ音という意味で使い、吃音者という言葉では使わないという位置づけをかってにしても、言葉というものは社会的なものです。社会で通じている意味でしか使えません。単に、言葉の使い方の間違いとして指摘されるだけです。更に、言葉は、使用者の意図から時には独自性をもって働きます。「差別の「結果」としての悲惨な現状を語ることが、差別の「原因」となってしまうことがある。差別について語る時は、はっきりと反差別の立場で語っていかなければならない」ということが、部落解放運動の中で語られてきました。差別語や差別的表現の問題でも同じです。

そのようなことからとらえれば、むしろ、マスコミのその言葉は差別語であるという指摘の方が妥当しています。被差別の当事者が非当事者から差別について教えられるという、悲惨すぎる悲喜劇です。

誤解のないように書いて置きますが、どもりという言葉を使つてはいけないと言っているわけではありません。どもりという言葉の差別性を押さえた上で、反差別という脈絡の中で、反差別という立場をはっきりさせたところで、開き直りに使うということは有意義なことだと思います。そのような立場性のないところでの差別語の使用は、差別語が「一人歩き」して、被差別者を傷つけてしまうという結果しか生み出しません。

伊藤さんの文はそのようなとらえ返しのない非論理的悲惨な文です。反差別という観点

を欠落して差別語を語るのは、それこそ言葉の遊びでしかないのです。このような不毛な文を巻頭言として書き、それが受け入れられ、引用される言友会の現状は悲惨とか言いようがありません。伊藤さんが退いた後、伊藤さんの非論理的文は全言連の紙面から消えましたが、理論の貧困―消失は輪をかけて進んでいます。何とか打開する途をと一石を投じて置きます。